

## 舞台の上の保育

津守 真

この夏、私は、台湾の文化基金に招かれて講演にいった。三十代、四十代の若い指導者たちが、遊びを育てる保育を推進しようと努力しておられる姿に私は感銘を受けた。三日間の研修会の最終日に、堀合文字氏の保育の実際がなされた。印象深かったことはいくつもあるが、このことについて記したい。

三、四、五歳の子どもたち約二十人を、大きな会議場の舞台の上でH先生が保育し、それを百五十人程の観客が客席から見ると頭で考えるとこれには多くの問題がある。保育者にとってすべて初対面の子どもたちである、言語が通じない、子どもたちには初めての場所であり、舞台という特殊な状況である等。半分疑念をもって臨んだ観客も多かったろう。それにもかかわらず、舞台の上の保育を研修会のプログラムに企画しようという主催

者の意気込みと、それを受けて立ったH先生の自信とがこれを実行させたのだと思う。

私はかつてH先生のクラスに長年出入りしていたので、必要となれば目立たない所でお手伝いしようと頭の隅で考えていた。しかし幸いにその機会はなかった。最初は保育を見物する自分自身に居心地の悪さを感じていたが、次第に観客のひとりとして見ることで、きるようになった。九時開始なのに八時頃からH先生は舞台にいて、保育室らしくなるように準備していた。舞台の上にはこの子たちに親しみのある玩具が幼稚園から運ばれていた。母親と先生に付き添われて、八時半頃から子どもたちが少しずつ来はじめた。

#### 舞台の上で

H先生は来た子どもにひとりひとり声をかけた。ほとんどの子どもたちは、じきに自分が見付けた玩具で何かをしようとした。

ひとりの男児Xが先生に手を引かれて舞台上上がるが、すぐに下におりてしまうことに私は目をひかれた。それを何度もくり返していた。こんな舞台上上がりたくない子どもがいても不思議はない。そのうちにXは舞台の上のH先生のお尻をぶつては下に逃げてくるようになった。両者の間に何が起こったのか詳細は分からないが、先生とこの子との間に関係がつけられつつあることが分かった。Xはこうした迷いの後に、舞台上の机の前で先生と折紙をはじめた。これまで帽子をかぶったままの子が、ときどき帽子を脱いで、折紙をじっくりとやり始めた。長い迷いの後にその気になって自分の活動をはじめた子ども

もの強さを見せてもらったように思った。

その間に、舞台の上では、数人ずつ子どもたちが寄り合って、箱積木で舟を作ったり、ブロックをつなげたり、衣裳をつけておうちごっこをしたり、絵本をよんだり、H先生のいつもの保育室とおなじ風景が生まれてきた。子どもたちはそれぞれに自分の活動をしはじめていた。

六、七人の男児が舞台の上を端から端まで走り回り、ピストルで打ち合ったり、ブロックを振り回して暴れ回った。それはかなり長時間つづいた。H先生はときどき「まねだね」と声をかけて、それを中国語で子どもに伝えて貰っていた。（通訳の人が壁際にいて、ときどき通訳をしていた。）H先生はそういう男児たちの激しい動きを止めようとはしていなかった。おうちごっこの子のひとり、男の子たちを追いかけ立ち回りを演じた。私の傍の通訳の人によると「泥棒」と言ったとのことだった。女の子は男の子たちを追いかけのを楽しんでいた。その男の子たちは、後半になると、武器をすてて、身をぶつけて互いにもみ合うようになった。この間に互いに身体を寄せ合って親しくなる体験をしたのだと思う。

子どもたちの喧騒の中、舞台の中央で、数人の子どもが頭を寄せて小さな動物やブロックを並べることに没頭していた。周囲にかまわずに、将棋のようなゲームをしているよう

に見えた。

だれかがH先生にお面を作ってほしいと言った。先生がひとりの子どもに作ると、次々に子どもたちが頼みに来て、先生はお面作りに忙しい。作ってもらった子はそれをかぶって歩き回る。先生に作ってもらう体験は、次には自分で作ろうという意欲を育てている。私はこの先生の保育で何度も見慣れた光景である。

こうして十一時まで二時間以上にわたって、子どもたちはそれぞれの活動に専念し、それは次々に変化していった。ときどき舞台からおりようとする子どもがいると、H先生は「そこまでね」と声をかける。舞台という空間の境界があることを意識しての発言だろう。

十一時十分前頃になって、H先生は「今日はこちら片付けましょう」と声をかけ、通訳がこれを子どもにも伝えた。子どもたちは片付けはじめた。「もうおしまい？」とたずねる子もいた。それから一列に並んで子どもたちは舞台をおりた。最初は疑念をもって見ていた人たちも納得するものがあつたのだろう。観客から一斉に拍手が起こつた。子どもたちに対して、また、H先生に対してだったと思う。

皆がおりても、最初舞台上上がるのをためらっていたXは、机の上で熱心に折紙をつづけていた。丁度、歌舞伎の幕がおりてから、独白の場があるように、この子はひとりで熱心に仕事をつづけた。その静寂のひととき、観客の目はそのひとりの子どもに集まってい

た。その子は悠然と最後までつづけ、H先生はそれをゆっくりと見守った。Xは自分で終わりにし、作ったものを手に持って舞台をおりた。再び観客から拍手が湧いた。

舞台の上で子どもたちは何故落ち着いて振る舞ったか

この三日前に、私は案内されて、台北市内にあるこの子どもたちの通う成長児童学園幼稚園を訪問した。西洋風の住宅を改造し、小さな部屋がいくつもあるこの幼稚園で、子どもたちが自由に遊びこんでいるのが印象的だった。(八十人の幼児に、給食の係も含めると二十人の大人がいる)。この子どもたちは、日頃から、自由な場で自分の活動することに馴れている。このことは、はじめての舞台の上でも落ち着いて遊ぶことを可能にした第一の理由であろう。

H先生は、この子どもたちにとって初対面の人だが、子どもたちは、自分を支えてくれる人であることをすぐに分かったようだ。すぐに心を開いてH先生に近寄っていった。こういう保育者がいることが舞台の上の保育を可能にした。

そして更に、この日の保育は、観客が見ている劇あそびのような場であることを子どもたちが認識していたことが、舞台の上の保育を可能にしたのだと思う。

### 劇あそびとしての認識

「今日は先生は見ているの?」という子どものことばが最初のころ聞かれた。担任の先

生は今日は観客であることを子どもたちは知っていた。また、舞台の端から観客を眺めて、「みんなここに住んでいるの?」と言う子どももいた。皆が見ている前で自分らしく振る舞うことを、担任の先生からもH先生からも期待されていることを子どもたちは承認していた。

この日、ある子どもたちは衣裳を着けてお姫様になって振る舞い、またTVの中の人物になって走り回った。日常生活では出しきれない自分自身を、ここで表現して遊んだ。劇あそびとは、せりふを覚えて筋書きに従って行動することではなく、子どもがある人物になりきり、それを自分のものとして活動することである。その点で、子どもが自分自身になりきり、自分を十分に発揮して遊ぶことを実現しようとする保育と本質的に共通なものを含んでいる。

子どもも、保育者も、観客も、舞台の上の保育は、それが普通の保育と同じように見えても、劇あそびの一種であることを認識するとき、それは異常な状況ではなくなる。

舞台には花道も備えられている。正面の緊張に耐えられなくなった子どもは、この中間地帯に逃げ出し、観客を見ておどけて見せる。観客は、子どもたちが舞台の上でそれぞれに自己実現してゆく過程を見て、自分も一緒にやらはらしながらも、最後には自己実現するのを見て、自分も満ち足りた思いになる。

担任の先生との会話の中で

この翌晩、私はこの子どもたちの担任の先生たちと夕食を共にし、お茶を飲みながら話し合う時間があった。先生たちの感想を次に列挙してみる。

○自分のクラスの子どもたちが、はじめて会う先生と舞台上に上がってどうなるのかと、ハラハラして見ている。

○皆、よくやってくれたと思う。この子たちを誇りに思う。

○舞台からおりて母親のところにいきたい子どもがいた。手を引かれて舞台上に上がったが、そのままでは参加しなければいけないものだろうか。

○Xは、いつもはこの日のような迷いを見せない。違う状況におけるXを見て参考になった。

○観客になることができたので、ふだん自分がしていることを距離をおいて見られた。今日、舞台の上で、活発な男児たちとおうちごこの女兒とが、次第に交流して遊ぶようになったのは予期しないことだった。二時間も遊びつづけたからだろうか。いつもは各部屋ごとに活動を分けているので、違う活動の子ども同士が接触する機会がないからだろうか。環境の作り方について今後研究したい。

私は担任の先生たちが的確に見ていることに感心した。そして、保育の実際はモデルにならってやれるものではなく、いつも「私の保育」を研鑽することがたいせつであることを述べた。

\*

私の養護学校に、演劇を専門にする人がボランティアで来ている。その人が、この学校は芝居の舞台のようだと行ったことがある。それぞれが自分自身を表現して動いている保育室は創造的な空間で、その点で演劇の舞台と共通なものがあることを指摘したのだろう。そう考えると、普段の保育も舞台の上の一種である。保育者が見られている意識を失ったら、保育の場は自分勝手を通る密室になってしまうかもしれない。

(愛育養護学校)

